

# 若山牧水『別離』における旅中詠への一考察 —〈生命〉への凝視の視点から—

王 瑋 婷\*

## 1. はじめに

若山牧水は、自ら「人生は旅であり、歌は人生の「旅のその一步々々のひびき」で「命の碎片」である<sup>1</sup>と述べたように、生涯旅をし続け、「旅の歌人」として定評がある。

そんな牧水は第三歌集『別離』によって文名を博した。歌集成立の背景には、園田小枝子という女性との四年間に亘る実らない恋があった。『別離』自序に示されているように、「一期の生活」を再度整理することによって、「過去から脱却し」「新たな自己に親しんで行き度い」というのが歌集出版の目的である。この意図のもとで、上巻においては恋の喜びの詠歌が多く、下巻には心のズレによる悲しみや、苦痛に追われて自身の生命の相を深く問わざるをえない心境への転化の過程が記されている。上田博が『別離』について「実らぬ恋に身を焼いた自身の〈生命〉の凝視の中から誕生したのであ<sup>2</sup>と指摘したように、「新生」を求める『別離』において、明らかに自身の生命への凝視が最大の主題となっている。

そして、『別離』に旅の歌も多いのである。伊藤益は旅の文学者に対する「旅」という空間の役割につき、「私」を原拠たる場所から引き離すことによって、自己の内面への「眼差し」を持たせる場である<sup>3</sup>と指摘した。となれば、『別離』における旅も、歌人の内面凝視を果たすのに適切な場と見做すことができるのではなかろうか。旅中詠への考察が、「生命」が各段階で呈した様相を把握するのに有効であろうと考えられる。そこで小論では、

恋の進展を主軸に歌集の構成を四つの段階—青年期、恋の絶頂期、破局の兆し、終篇近く—に分け、各段階の代表的な旅中詠一連を選出し、旅での自身の生命への省察を考察していく。それによって、旅が『別離』の中での役割、各段階での歌人の「生命」観照、またはその「新生」の道程などを、明らかにしてみたいと思う。

## 2. 分析手法—歌を連作として読む

歌の考察に入る前に、まず小論での歌の分析手法について説明しておく。

明治43年に刊行された『別離』は、前の二歌集—『海の声』『独り歌へる』を再編して、新作を加えてできた作である。歌が八割以上原作と同じながら、配列上は大きく異なる部分が見られ、歌集の詞書などにも牧水の伝記的事実といくつか食い違いがあることは、諸氏の考察によってすでに究明されている<sup>4</sup>。その成因について諸氏の見解は銘々であるが、大まかに言えば、森脇一夫と上田博は伝記的事実を重視する立場を取り、一方、伊藤一彦は作者の編み直しの意図を重んじ、『別離』を「連作」として読む可能性を提出した上に、歌集の「歌の掲載の順序」は歌人の「『内的生活』の時間の『順序』」<sup>5</sup>によるとも指摘した。

小論ではさらなる精察を行う余裕は無いが、『別離』上巻巻頭にある「明治37年4月」の日付はちょうど牧水が上京した時期と符合している上に、巻頭歌<sup>6</sup>も初出期日に関わらず、思郷の歌であるため配置されたこと、または「安房の渚」一連に

\* 台湾大学 院生

つき、詞書にある日付は伝記的事実と異なるということが一種の創作手法<sup>7</sup>として捉えられることなどから推察すれば、伊藤氏の「内的生活」順序説がより有力だと考え、それに従いたい。また、牧水は歌の「真実」力を極めて重視していたため、小論では牧水の伝記的事実を傍証にして、歌の初出や当初の配列などを考慮せず、『別離』中の表現から歌意を考え、分析していくことにする。

### 3. 旅中詠への考察

#### 3.1 青年期：「91~185」-旅の基調の成立

この一連は牧水の大学時代、西国巡遊の歌を集めたもので、中には歌人の代表歌と目される二首がある。

109 けふもまたこころの鉦かねをうち鳴ならしうち鳴しつづあくがれて行く

111 幾山河いくやまかは越えさり行かば寂しさの終はてなむ国ぞ今日も旅ゆく

111 首について、牧水は「自歌自釋」の中で「人間の心には、取り去る事のできない寂寥が棲んで」おり、「生きてある限りは續き續いてあるその寂寥にうち向うての心を詠んだもの」<sup>8</sup>だと解釈した。木俣修はこれを引用しつつ、歌人は「漂泊」することによって「人の世の悩ましさを消そうとし、「生き甲斐を感じようとし」<sup>9</sup>ているとの見解がある。確かに氏の指摘する通り、「寂寥」を消し去ろうとして旅に出るとも解釈できるが、しかし、逆に旅で「寂寥」という「心」に「棲んである」永続な本質を見出すこともできれば、「寂しさの終てむ」国に「あくがれ行く」<sup>10</sup>旅は、実は絶えず自分の「心」、自己の「生命」の本質を見つめようとしたものだと考えられよう。しかし、旅による生命への実感は、「寂寥」しかないのだろうか。

伊藤一彦は二首について「あくがれと寂しさは一枚のコインの表と裏」で、「自然の中に生きるい

のちの有限性の痛切な自覚がそのコインに輝きを与えている」<sup>11</sup>と指摘した通り、歌の根底には牧水の自然観が流れているように思われる。「自然の神秘」を知るのが「唯一無上の幸福であり感謝である」(明42・5・22石井貞宛書簡)と述べ、自然を深く敬愛する牧水は、91~185の一連の中に、「木の芽ふく」(104)のように生命力に溢れ、「大海の潮」(116)のように永劫たり、人間を抱擁し生かしている(177)ものとして自然を詠じている。さらに、歌人と自然との関係性も以下の一首から伺える。

102 地つちふめど草鞋わらぢ声なし山ざくら咲きなむとする山の静けさ

自然に生息する生命の息吹を実感する喜びが歌から見て取られ、旅における歌人と自然との関わりは、このように親しく交じり合うものなのである。そして、自然の脈動に包まれつつ、歌人もまた「われ」へ眼差しを注いだのである。

110 海見ても雲あふぎでもあはれわがおもひはかへる同じ樹蔭こかげに

上田博は『無窮の一部』としてこの地上の、樹木の蔭に一生を送りゆく存在で自己を捉え、『あはれ』に、変化し、静もる自然界に含まれる生への感慨がある<sup>12</sup>とこの歌を評釈した。「あはれ」とは強い感動の表出語で、喜びにも悲しみにも使えるが、自己の生を「あはれ」と感嘆したのは、「いのちの有限性の痛切な自覚」でありながらも、「地上」に生息する、自身の生の「不可思議」(443)を実感した喜びとして捉えられるのではなかろうか。武川忠一は牧水の歌の内実について、自然の中に生きて、どこまでも「孤」である哀感と、「個」体として存在する自己への愛惜とが並存する、「自己の位相の意識」にある<sup>13</sup>と説いたが、こうした意識は110首にも含意されていよう。

旅の中で無窮たる自然に包まれ、「孤」でありつ

つも「個」である、生命への愛おしさが強く実感される。それこそが「あくがれて」(109)「旅ゆく」(111)原動力ではなかろうか。こうした旅中詠の基調は青年期において既に確立できたのである。

### 3.2 恋の絶頂期：「210~285」—安房の渚にて

宮崎の山村に生まれた牧水は、幼少期から「海」に強い憧れを持っていた<sup>14</sup>。『海の声』自序に「われは海の声を愛す。(中略)その無限の声の不安おほきわが胸にかよふとき、われはげに云ひがたき悲哀と慰藉とを覚えざらばならず」と綴ったように、海に憧憬を抱き、「無限」たる海によって自身の有限なる生命への「悲哀」が喚起され、同時に生命の始源をも象徴する海に向かってなつかしさに似る「慰藉」を求めたのであろう。『別離』における恋の絶頂期を代表するこの一連の旅先は、まさに憧憬の対象たる「海」で、詞書に「女ありき」とあるように、恋人を伴っての旅である。

前節において、牧水の生命への感受は自然との関わりの中で確立するものであると論じたが、この関係性は恋によってどのように変化するのだろうか。ここで、まず恋の「陶醉感」<sup>15</sup>を詠む例を挙げて考えておく。

214 海<sup>かな</sup> 哀<sup>し</sup>山またかなし酔ひ痴<sup>し</sup>れし恋のひとみにあめつちもなし

217 接吻<sup>くちづ</sup> くるわれらがまへにあをあをと海ながれたり神よいづこに

上田博は214首について、「すべての感情は恋の陶醉感のなかに融けこんでゆく」と述べ、217首における海は「内的宇宙のイメージ化された」<sup>16</sup>ものだと解説した。恋人に心身とも受け入れられた狂喜の一瞬は「あめつち」よりも永久のように捉え、自然の全てが恋に酔った目に融け込んでいったのである。ここで自然との一体化は、上田氏が指摘した通り「内的宇宙」化で、そこに前節で論じたような自己凝視の眼差しや、「孤」や「個」の

感受など全くなく、歌人の視線は、あくまでも恋人と自己の共在に注がれていると言えよう。

しかし、一方、恋人に伴われながらの不安を詠んだ歌もある。例えば234首に「闇冷えぬ」や237首に「みなし児」とあり、寂しさと不安が暗示されていよう。そして、次の一首に自己の心情を「白鳥」に託し、具象化して詠じたのではなかろうか。

238 白鳥<sup>しらとり</sup>は 哀<sup>かな</sup>しからずや空の青海のあをにも染まらずただよふ

この一首は実は安房行前の作であるが、恋の絶頂期の心情を表そうとして意識的に編まれたものだと考えられる。挿入の意図について、島津忠夫は、恋の狂喜を詠む眼を「一転する時」、「その澄み渡った愛恋の眼の底には、怖ろしいまでの孤独の悲しみが戦慄となって襲ひかか」り、「白鳥」の歌を「歌はずにはをれない、悲痛な本然の我れに帰るのであった」という若山喜志子の解説を引用しながら、同調を示している<sup>17</sup>。確かに氏の指摘する通り、恋の陶醉感によって自然の「内的宇宙」化が果たされた後、「海」にも「空」にも融和できず、「ただよふ」「白鳥」に向けて「哀しからずや」と声をかけたことから見れば、白鳥は単独で存在すべきでないという眼差しの底には、恋人を失い、独りになることへの不安が潜んでいると解釈できなくもなかろう。しかし、一方、「白鳥」は古典文学の中で、『日本書紀』に日本武尊が白鳥に化した話が成立して以来、神性を持つ美しいものとされてきており、また、白とは一般的に周囲の色に融け込んで無となりやすいが、238首において「白鳥」は決して周りと同化しない「染まらずただよふ」存在として描かれている。つまり、歌人は白鳥に託し、恋による我が生命は不安を抱きながらも純粹無垢で、「哀し」く「愛し」いものであると、自らを述懐したのではなかろうか。

このように、「安房の渚」の一連に恋の狂喜、恋人との共在への渴求、独りになる不安が詠まれている。この時期の生は、恋人との共在によって満

たされる相として呈されているのである。

### 3.3 破局の兆し：「575~643」—再び安房へ

この一連は恋の「終り」(574)を予知した後、一年ぶりに安房の渚へと一人再訪した時の心境を詠んだものである。恋の苦しみから脱出せんがため旅立ったが、今度は海によって慰められなかったのである。

581 海に 来<sup>き</sup>ぬ思ひあぐみてよるべなき身は  
いづくにも捨てどころなく

588 日は日なりわがさびしさはわがのなり  
白昼<sup>まひる</sup> なぎさの 砂山<sup>すなやま</sup> に立つ

安房滞在中の尾崎久彌宛書簡(明42・2・4)に「日は日、海は海、僕は僕、それらの間には實に何等の交渉も縁故も無い(中略)僕の心にはたゞ荒れすさんだ自己の外には何ものもない」と述べたように、「なぎさ」<sup>18</sup>に来たが、「日」と「海」との「交渉」がなく、自然に融合できない「よるべなき」「さびしさ」が二首詠まれている。恋人との共在によって満たされた生命が、独りになったことで「荒れすさ」み、かつて慰藉を与えてくれた自然を、今度は自ら拒否したのではなからうか。

607 わがこころ 濁<sup>にご</sup>りて重きゆふぐれは 軒<sup>のき</sup>  
そとも行くを好まず

612 耳<sup>みみ</sup>もなく目なく口なく 手足<sup>てあし</sup> 無きあやし  
きものとなりはてにけり

「濁りて重き」心は、外界に出ようとしなない。周りの環境や他者との繋がりを失えば、自己存在のあり方も把握できなくなる。自然との関わりの中で「生命」を実感しつつ「あくがれて行く」のが本然の自己であれば、恋の苦痛に囚われ、どこへも行けない「手足無きあやしきもの」となったのは、つまり自己を見失ったことに等しい。この自

覚のもとで、歌人は自分の生命への省察を余儀なくされたのであろう。以下二例を挙げておく。

610 けふ見ればひとがするゆゑわれもせしを  
かしくもなき恋なりしかな

616 やどかりの 殻<sup>から</sup>の 如<sup>ごと</sup>くに生くかぎりわれ  
かなしみをえは捨てざらむ

「やどかり」の如き生というのは、「人生は旅である」との概念に通じており、「をかしくもな」と振り返った恋、それは「ひとがするゆゑ」自分もしたもので、恋の苦痛は人生の旅を「生くかぎり」「捨てざ」るを得ない寂しさの中に包含されているとの、心に蟠踞する絶対的なものから相対的なものへの視線の転換が二首から伺えよう。その後、気分の明るさを詠む歌<sup>19</sup>もあり、束の間に救いを感じたが、歌の終盤にまた「敗残者」(640)だと自叙した。恋の苦痛は未だ大きいようである。

この一連において、恋の絶望から脱出し「真個の自分」(明42・2・11 石井貞宛書簡)への回帰は果たせなかったが、自己の生命の享くべき様相をはっきりと自覚できたと考えられよう。

### 3.4 終篇近く：「863~908」—百草山にて

歌集の終篇近くに、恋人との思い出の地である百草山を再訪した歌46首が配置されている。この一連の歌に恋人への未練が未だ見られる。

872 わがこころ 沈<sup>しづ</sup>み来ぬれば火の山のけむり  
の影をつねにやどしぬ

「火の山のけむり」<sup>20</sup>に失恋による陰影が暗示されていよう。牧水は百草山滞在中、石井貞宛書簡に「相變わず私は心を腐らせて居」り、苦しみのあまりに死をも考えたが、それができず、「ただ自分の生きて居るのを、じつと見て居る」(明42・6・26)しかない心境を綴った。このような苦しみの中で、唯一の慰めは鳥の啼き声である。

867 とびとびに <sup>おちば</sup>落葉 せしごとわが胸にさび  
し <sup>ち</sup>散りぬ <sup>ほほじろ</sup>頬白鳥の啼く

875 わが死にしのちの静けき斯る日にかく頬  
白鳥の啼きつづくらむ

前掲の書簡にも「彼等を聴いて居る間、私の生命は全く彼等の音いと同じ音いろになつて存在して居る（中略）寂しさ、温かさを感じて、心が慰められます」とある。佐佐木幸綱は牧水の鳥への愛着について「他界から来た聖なるものに対するかのごとくにあこがれ、鳥によって自己の地上性を反照し、（中略）救済を希求していた」<sup>21</sup>と論じた。鳥は古典和歌の世界で、しばしば常世より飛来し、常に変わらぬ「古声」で人の懐かしさを喚起するものとして詠まれているが、確かに佐佐木氏の指摘通り、875 首にも鳥のこうした性格が内在しているように思われ、さらに「死」の想念とも繋がれ、永遠たる鳥の啼き声と地上にある自己の生命との対比も歌から看取できよう。また、867 首に鳥の啼き声は「落葉」に比したが、それも『別離』の中で「死」を象徴する重要な歌語である。

750 死をおもへば <sup>こずゑ</sup>梢 はなれし <sup>らくえふ</sup>落葉 の <sup>つち</sup>地に  
ゆくよりなつかしきかな

ここで「死」を「なつかし」く捉えたのはなぜだろうか。大岡信は牧水の自然観を『『生命の循環』という観点によってとらえようとする態度』<sup>22</sup>であると解した。「落葉」が「地」に落ちて他なる生命の養分となるように、自分の死も自然の「循環」に包含されており、生命の根源たる大地への回帰として「死」を捉えたため、「なつかしさ」を感じたのではなかろうか。百草山の一連にも「死といふもののなつかしきかな」（900）とある。自然の懐に浸り「なつかし」い「死」を思うことによって、生きる辛さから束の間に「救済」を得たのか

もしれない。そして、自然の循環の一部として自己の生命を見る眼差しは、自然に受容された感受性に由来していよう。この時の自然との関係性は、再び「わが行けば木木の動く（887）」ように、生き生きとしたものとなったのである。

一連に他者への共感を詠む以下の歌もある。

895 きはみなき <sup>たび</sup>旅の <sup>みち</sup>途なるひとりぞとふと  
なつかしく思ひいたりぬ

「さびしさ」（660）を抱えて生きている「よるべなき生命」（660）に属する「ひとり」であると自覚し、他者を同士として見る眼差しによって慰藉を得たのではなかろうか。そして、人生の「旅」の「途なるひとり」と自比したのは、恋の苦痛に囚われる状態から解放され、再び人生に向けて「あくがれて行く」気持ちの表れであろう。

百草山において、自然との交歓の中で真の「われ」を感じ、また他者との共感を通して慰藉を得たことで、恋の苦悩に揺るがされた生命は、「真個の自分」に回復しつつあったように思われる。

では、同じく思い出の場所の再訪であるのに、海では慰められないものの、山では受容されたのはなぜだろうか。ここで場所の性質について考えてみたい。

牧水は宮崎県の山村である坪谷に生まれた。「嶮山が恰も靈魂を帯びたかのように躍動して見え」<sup>23</sup>る豊饒な山林の生活によって、その多感な魂が養われた。生涯故郷の山々と家族を愛した牧水は、『別離』にもそれを多数詠み込んでいるのである。

14 <sup>ひうが</sup>日向の <sup>くに</sup>国むら立つ山のひと山に住む母  
<sup>あきばれ</sup>恋し秋晴の日や

本節 3.2 の考察において、既に「海」は歌人の「憧れ」の対象であると述べたが、その対極にある「山」は、このように歌人の生の根源を裏付ける場所で、生命の「回帰」の方向であると考えられよう。「憧れ」の海にて恋と青春を謳歌し、そし

て「回帰」の山にて、生の基盤が回復できたという場所の役割は、『別離』に見られるのである。

#### 4. 終りに

以上、『別離』における旅中詠を時期別に考察してきた。永劫たる自然の脈動の中で「孤」でありつつ「個」である自己の生命を実感し、「あくがれて行く」のが、歌人の旅の基調である。しかし、恋の絶頂期において、恋人との共在を渴求する生命は「個」（「孤」）になることを恐れた。そして、恋が破局した後の「海」において、閉ざされた心が自然と融合できなかつた。この苦悩によって、生を享くる本来の相について省察し始め、周りの他者へも目を向けた。最後は遂に「山」において、恋の苦痛を人生における不可避な寂寥として受け止め、再び自然を享ける「個」としての生命を実感し始めたのである。このように、自然との関係性を見つめることによって「真實の自分」<sup>24</sup>を見出すのが、「旅」の最大の役割だと言えよう。失恋後の旅にて、歌人は絶えず自己の生命へ内省的な眼差しを注ぎ、さらに、この眼差しも歌人の「新生」へと導いていき、歌集の結句、再び海一憧れの方向へ旅立ったのである。

はるまひる  
1004 春白昼 この港に寄りもせず岬を過ぎ  
て行く船のあり

この時、歌人はどのような「新生」を果たしたのだろうか。歌集の終篇近くにもまだ恋への未練が詠まれている点から、恋の苦痛から完全に脱出できたとは言いがたい。平賀財藏宛書簡に「戀といふ奴は一度は失敗してみるもいかもしれぬ、そこで初めて味がつくやうな気がする」「何となく人生のうれしきなつかしさを覚ゆるやうな氣になった」（明42・7・12）とあるが、ここで言う人生の「味」には、人を愛する幸福と苦痛、人生の不可避な寂寥、他者の魂への共感、深化された自然

観等、これら全て含まれていよう。味のついた「新生」とは、「過去」との決別ではない。過去を受け止めて生きていくからこそ、初めて「新たな自己」になり得るのではなからうか。「歌の真實力」を『生命の欲求力』の強さ<sup>25</sup>に求めた歌人は、味のついたさらなる豊饒な生命を以って、また次の段階へと、歌境を展開していくことになる。

#### 註

- <sup>1</sup> 第二歌集『独り歌へる』自序
- <sup>2</sup> 上田博『和歌文学大系 27 別離』P.210
- <sup>3</sup> 伊藤益「存在への志向性」P.21
- <sup>4</sup> 森脇一夫『日本近代文学大系 17 若山牧水集』、伊藤一彦『『別離』の世界』、上田博『和歌文学大系 27 別離』などを参照。
- <sup>5</sup> 伊藤一彦『『別離』の世界』P.79
- <sup>6</sup> 「水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまぢれる深山の昼を」。初出「新声」明39・5。
- <sup>7</sup> 詞書に「明治四十年早春」とあるが、実際に行ったのは同じ年の暮れである。牧水が「私の歌の出来た時」に「此等の歌を読み返す時には必ず『春』といふ感じが伴ふ」とあるので、それは「恋の春」を表現するための手法であろうと考えられる。
- <sup>8</sup> 「自歌自釋」『全集 第四卷』P.398
- <sup>9</sup> 木俣修「若山牧水」PP.451~453
- <sup>10</sup> 和歌の伝統において、「あくがれゆく心」は、何かに惹かれてさまよう魂のことを指す。例：「心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しより」（源道済・『新古今集』秋上405）。（渡辺秀夫「こころ」『詩歌の森—日本語のイメージ』を参照）
- <sup>11</sup> 伊藤一彦「解説」『若山牧水歌集』P.315
- <sup>12</sup> 上田博『和歌文学大系 27 別離』P.21
- <sup>13</sup> 武川忠一「若山牧水の魅力」
- <sup>14</sup> 「おもひでの記」（『全集 第五卷』P.450）に「高い山の頂上へ行つて、あれが海だ、と指ざされると、實に異常のものを見る様に、胸がときめいた。」との叙述がある。
- <sup>15</sup> 上田博『和歌文学大系 27 別離』P.40
- <sup>16</sup> 同前掲書 P.40
- <sup>17</sup> 島津忠夫「若山牧水」PP.74-76。島津氏の引用は若山喜志子が1947年、光文社刊の『別離』での解説による。
- <sup>18</sup> 和歌の世界で波の寄るところである「なぎさ」は、身や心の寄せるべき場所の象徴でもある。例：「泣く涙世はみな海となりなん同じ渚に流寄るべく」（善祐法師母・『拾遺集』恋五925）。（菅野洋一・仁平道明「なぎさ」『古今歌ことば辞典』を参照）
- <sup>19</sup> 「いと清きものあはれにおもひ入る海のほとりの明き木立」（628）。
- <sup>20</sup> 『竹取物語』「富士の煙」の段を典拠に、和歌において火の山のけむりは失恋後の消え果てない恋心を象徴するようになった。例：「富士の嶺のならぬおもひに燃えばもえ神だに消たぬ空しけぶりを」（紀乳母・『古今

集』雑体 1028)

- <sup>21</sup> 佐佐木幸綱「歌は翼」PP.70-71  
<sup>22</sup> 大岡信「幾山河こえさりゆかば」P.21  
<sup>23</sup> 「おもひでの記」『比叡と熊野』『全集 第五卷』P.438  
<sup>24</sup> 『静かなる旅をゆきつつ』『全集 第七卷』P.6  
<sup>25</sup> 上田博『和歌文学大系 27 別離』P.209

#### 参考文献

伊藤一彦『『別離』の世界』『牧水の心を旅する』2008  
角川学芸出版  
伊藤一彦『若山牧水歌集』2009 岩波書店  
伊藤益「存在への志向性」『旅の思想—日本思想における「存在」の問題—』2001 北樹出版  
上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院  
大岡信「幾山河こえさりゆかば」『若山牧水 流浪する

魂の歌』1981 中央公論社  
菅野洋一・仁平道明『古今歌ことば辞典』1998 新潮社  
木俣修「若山牧水」『近代短歌の鑑賞と批評』1968 明治書院  
佐佐木幸綱「歌は翼」『底より歌え』1989 小沢書店  
島津忠夫「若山牧水」『近代短歌一首又一首』1991 明治書院  
武川忠一「若山牧水の魅力」『国文学 解釈と鑑賞 62(2)』1997 至文堂  
森脇一夫『日本近代文学大系 17 若山牧水集』1971 角川書店  
若山喜志子・大悟法利雄編『若山牧水全集』1958 雄鶏社  
渡辺秀夫『詩歌の森—日本語のイメージ』1995 大修館